# 會報

會岳山本日 | 129 | 昭和19年1,2月


## 四季

伊藤秀五郎

北海道の季節的變化の素描を、札幌附近の風景を對象として簡單に書いてみよう。

北海道の冬は長い冬である。例年十二月の十日前後には根雪となり、それから三月末まで三、四尺の雪に覆はれてゐる。十一月と四月は、秋から冬への、また冬から春への季節の移り目であるが、十一月には初雪のあと根雪になるまで二三回の降雪はあり、大陸からの寒冷な西北風が募つて、霏の日などが多く、四月にはまだ平地に殘雪も多く、吹く風も肌寒く嚴冬の餘寒がすつかりは消え去らない時期であるから、その前後ざつと半年は冬といつてもよいのである。溫度は年によつて相違するが一二月の頃が最も寒い。最低零下三十度に及ぶ旭川や帶廣地方に較べればそれほどではないが、しかし相當に寒さも嚴しい冬である。吹雪も多い。海から石狩平原を吹き拔けてくる風が、蕭々と森にこだまして、吹きつける雪つぶてに風に向つては進むことも出來ないやうな日も十日に一度は訪れる。尤もさういふ日の一度も來ない冬は何か物足りなさを感じはするが。

とにかく札幌でも冬の嚴しさは身に泌みる。この冬の嚴しさが緩みはじめるのは例年であると二月十一日紀元節の前後である。一月の末近くなるとふた月の雪の生活に倦んで來て、もうその紀元節の頃が待たれるのである。殊に酷い寒さの年や雪の多い冬にはさうである。スキーを樂しむ若者はいつまでもその寒さが消えず美しい粉雪が續けばよいと思ふ。しかし一日家の中で暮す者達は、積る門口の雪を掻き掃く度に、ストーブの灰を捨てに裏口に出る度毎に、早く春が來ればよいと思ふのである。ひとり年寄や病弱の者に限らず、子供達にとつてさへ、永い冬籠の後に來る春を待つ心は樂しいものに違ひない。さういふ春の兆は二月十日頃の、晴れて風のない、どことなく嚴しい冬の峠を越したことを思はせる或る日に、どこからともなく訪れてくるのである。空はまだやはり蒼く澄んでゐるがいくらか淡いクリーム色にうるんでゐる。昨日降り積つた蝦夷松の枝の粉雪が、音もなくひら〳〵と冬の陽に輝いてこぼれ落ちる。社の杜で烏がかあと一聲のびやかに啼く。その啼聲に應ずるやうに橇やスキーで遊ぶ子供達の元氣のよい叫び聲が聞えてくる。ストーブを焚く室の屋根からは、長く垂れ下つたつらゝの先から雪解の水がぽたりと落ちる。あゝもう春だなと思ふ。やがて來る雪解の春がさうした日の色彩と音響と香氣とに感ぜられるのである。そのやうな暖い日が二三日續くとまた前の寒さが歸つて來る。時々は吹雪もある。こんな事を二三度繰り返してゐるうちに二月もいつか過ぎて行く。さうして物置に積んだ薪の山はずつと小さくなつてくるし小屋の石炭も殘り少くなつていく。

三月になるともう冬も終りに近いことを思はせる。寒さも遠のき吹雪も稀になる。晴れた日が多くなり、降る雪も濕つたぼたん雪に變つてくる。積雪も次第に解けはじめる。雪の下からも地熱がほんのりとほてつて來るやうな氣がする。猫柳の芽が急に大きく膨らんでくる。樹々の小枝の先に垂れ下つた小さなつらゝが朝の陽にきらきらする。人々は重荷を下したやうな、何かしらほつとした氣持になる。さうして長かつた一冬の間の生活を振り返へる。するとつらい嚴しい冬が懷しい想出となつて浮んでくる。かういふ時に街を離れた田舍では、百姓達はもう春への準備に餘念がない。毎日々々甑肥が重い橇でまだ雪を被つた畑に運ばれ、ところ〴〵に積み上げられる。溫床にも早蒔の野菜の蒔付が始められる。かくて十日もたつと雪が急に解け始め、ざらめになりぬかつて下駄の齒を取られるやうになる。晴れた暖い日の日中には雪解の水が河のやうに道路を流れる。街の中ではやがて冬の間中に溜つた煤煙と馬糞で汚れた道路が露れてくる。この頃が街の中は一年中で一ばん汚い時である。そして家屋の貧弱さがひときは目立つて感じられる時である。

四月になると山や畑でも地肌がだん〳〵露はれてくる。しかしまだこの頃には街の中には肌寒い空風が乾いた馬糞を交へた砂塵を卷き上げて行人の襟元に吹きつける。平原の風景もまた實に索漠たるものである。そこに早春の陽光は射

目次


○四季……伊藤秀五郎…一
○五六岳……中島正文…三
○九州山信……藤島敏男…四
○切拔帳
山岳、地誌、民族等に關する新刊書目拔萃……五
○圖書紹介……六
○會員通信……八
○會務報告其他……九

しても、まだその惠に浴すべき草木は芽立たない。寥々たる曠原の展開である。唯その荒涼たる景色の中に、北海道の春を力强く象徴してゐるものが一つある。それは北海道に特有な少しくすんだ灰色を帶びた淡黑い土の色である。それは特有の風化狀態にある灰白土（ポドゾル）といはれる土であつて火山灰地や泥炭地を除けば、北海道の土壤は主としてこの灰白土から成つてゐるのである。四月、まだ山の峰は冷い雪にみぞれ平原を吹く風も寒く、滿目蕭條たる風景の中に、この土の色ばかりは、長い間深い根雪にやさしく育まれて來たやうな柔い感じがするのである。これは蒔かれた作物が伸びてその土の肌を隱して了ふまで、四月から五月へかけて到るところの畑地に見ることが出來る土の色である。若草が春の象徴だとばかり思つてゐた私は、ある時ふとこの濕り氣をもちながらなほ無限の溫味をこめた土の色を通して、鬱勃として迫つてくる春を感じて以來毎年春になつてこの土の色を見るのが非常な樂しみの一つになつたのである。私はかつて穩和な京濱の郊外の、麥の靑さに感じたよりも、もつと力强い春を、雪解の頃の北海道の土に感ずる。

五月は北海道の風景の最も變化に富んだ季節である。その色彩の變化が複雜であり、且つその變化が急激なのである。これは花がこの頃に一齊に開くことゝ、濶葉樹は椎や椿の如き常綠樹を交へず、すべて落葉樹であるために五月になつて一度に芽生えてくるからである。四月の終りには純白の辛夷が最先に咲く。山には辛夷が多いのである。五月になると櫻も梅も梨も林檎も皆時を同じくして咲き出す。五月は北海道の花の季節でもある。山の樹の色がまた非常に多彩である。シナの木の芽立のやうに赤味を帶びた茶褐色のものや薄綠、薄紫、黃色、空色それに白樺の白い幹などが交つて、實に變化に富んで美しい。これらが一日々々と濃くなり、やがてすべて綠色に變り、五月の末頃には濃淡の陰影を映した一塊の深い綠に被はれて了ふのである。四五月頃の落葉松の澄んだ綠の芽立もまた譬へるものなく美しい。あの白味を帶びた獨特の澤のある一風變つた枝振の林檎の幹の立並ぶ林檎園の風景も面白い。駒鳥その他の小鳥の多いのも特徴である。カツコウは毎年決つて五月の二十日前後に訪れてくる。空は澄み渡つた快晴の日が多く空氣は冷く乾いて爽快である。牧場や野原には牧草が芽立ち、その中にタンポヽや淡紫の可憐なエゾノエンゴサクの花が一面に咲き亂れる。沼地には水芭蕉が眞白い獨特の姿を見せる。山の頂や溪間には殘雪が朝日に輝いたり夕陽に紫靄に映えたりする。北海道の五月は美しい季節である。

六月は春から夏への移り目である。北海道には梅雨は無いので、鬱陶しさもなく、蒸暑いこともないが、氣溫は急に上昇して如何にも夏らしい日が多くなる。綠は益々濃くなり、ライラツクやアカシアの花が甘い香氣を漂はせ、苺や櫻桃が出盛つてくる。夕方に深い霧が襲つて街燈が霞むやうなことも時々ある。夏は七八月の二月である。夏蒲を必要とするのもこの二月の間である。日光も强く、楡の木などは鬱蒼と茂つて、北海道特有の短い牧草のローンの綠がいよ〳〵深い。森に蟬がかしましく鳴き季節の頂點を告げる。作物はぐん〳〵成長し、早蒔の蔬菜類が市場を賑すやうになる。トマトが色づいて美しい。この時分には夜は殊更に短く朝は早くから明るみ、西に傾いた夕陽はいつまでも平原を照してゐる。しかし八月の二十日頃になるともう朝夕は涼しく、輕井澤や御殿場の高原の初秋を思はす季候となる。木の葉にも夏の潤ひが失せ、陽ざしも次第に鈍くなり、空氣にも何處となく秋色が漂ひはじめる。九月にはいればもう十分に秋である。林檎なども次第に色づいてくる。山の樹々も漸く黃ばんでくる。畑地には甘藍、馬鈴薯、大根、白菜などが靑々と育つて收穫を待つばかりである。その間に處々サルビヤ畑が眞紅の色を飾つて、綠と美しい對照をなしてゐる。水田にも秋のみのりが豐かである。

秋は十月に至つて正に闌である。山々は美しい錦で飾られる。紅葉の色は飽くまで冴えて深い。それは晝夜の寒暖の差が著しく、霜が急に來て、豐かな色素の形成を促すからである。藻岩山や圓山の樹々の日々の變化を見てゐると、季節の移り方の素早さに思はず驚歎するのである。時には早朝薄い朝霧が山裾にたなびいてゐることもある。それを透して澄んだ秋の陽の光がさつと公園の芝生や黃ばんだ街路樹の上にこぼれてくる。深く呼吸すると冷かに乾いた空氣がしみ〳〵と肺の細胞に觸れていく。吐いた氣息が白く凝つて秋の深さを思はせる。精神も透徹して新しい氣力が沸々と湧いてくる。秋は健康の時である。空の澄み渡つた近郊に出て溪谷の路を歩いてみる。楓や蔦の葉がひときわ美しい。自然は至るところ詩情に滿ちてゐる。そして農村は收穫に忙しい。十月は農村の一年間の總決算の時である。作物は何もかも一度にこの季節に出來るのである。十月の終りになると山のやうに大根を積んだ馬車が幾臺も市街の方へ續いて行く。放牧された牛達もゝう殘り少い靑草を一心に食んでゐる。さういふ夕方の空を雁や鴨のやうな渡り鳥がせわしさうに群をなして飛んで行く。町の人達もやがて近づく冬のために心忙しく色々と準備に取りかゝる。何處の家でも洗つた大根をわらで編んですだれのやうに幾條も軒下に吊す。漬物の仕度である。

秋晴れの日が幾日か續いた十月の末の一日、朝からどんよりと曇つて、平原を越して西北の海の彼方が灰色の厚い幕で覆はれたやうに暗く、壓しつけるやうな氣はひのする日、夕方になつて手稻山の頂に雪もよひの雲が垂れ込め、急に冷えびえと肌寒く感ずる時にはきつと山に初雪が訪れるのである。初雪が平地にも山と緒に來ることもある。今年もその頃の或る夕方、例の雪雲が手稻の頂きを閉ざし、發寒川の方へかぶつてゐた。そして耳朶に泌みる寒風が吹き募つて來た。だから明日は手稻は白くなると話しながら寢たが、翌朝起きてみると平地も一面に白銀の世界であつた。初雪はいつもその

日に消えて了ひ、その後にはま暖かな日が歸つて來るが、しかしもう秋も終りである。季節は急速に轉回する。

十一月は曇天や雨の日が多く、霜が烈しく木々の葉を吹き落すことも屢々である。一日々々と山の樹は裸になつて行く。落葉が庭の隅まで埋め盡す。公園では毎日のやうに落葉を焚く煙が池の面を漂ひはじめる。夕方になると海邊の方から列をなして歸つて來た烏が人家の近くの森に群をなして騒々しい啼聲や羽搏きをするのが急に目立つてくる。空は灰色に曇つて悒鬱である。凩がかさ〳〵と落葉を吹き散らす。人々は何かせき立てられるやうなあわたゞしさを感じ、近く迫つた冬の日を想つて、沈んだ氣分に誘はれる。十一月の秋から冬の移り目が北海道のいちばん佗しい、落ちつきのない季節である。凋落の秋といふことをつく〴〵と感ずる時である。

しかし人々はこの間に早く冬籠りの仕度を終へねばならぬ。薪を割る。冬から春に使ふ馬鈴薯や人參、大根などを土にいける。白菜や甘藍を圍ふ。冬着を取り出す。そしてストーブを取付けて了へばそれですつかり準備は出來た譯である。

十二月にはいると急に雪の日が多くなり、十日前後には遂に根雪となる。もう降る雪も粉雪である。それから降つた雪はもう解けず、積る一方である。昨年の十二月八日の感動の深い放送を私どもはやはり雪の降る中で雪の上で聽いた。今年も十二月の初めから根雪となり、雪の中で記念すべき一週年を迎へたのである。その頃は朝は大抵晴れてゐる。しかし午後には必ず曇つて雪もよひとなるのである。夜の明けるのは六時半である。七時南に偏つてその薄らいだ赤味の勝つた大きな太陽が地平線上に姿を現はす。やがて夜中に降り積つた粉雪がきらめき、靜寂な林には鳥の聲もなく、この朝のひと時、自然は冬への深い沈潛を象徴してゐるのである。冬が來たまた長い冬の季節を迎へたのである。しかしもうその頃にはあの佗しい落ちつきなさは影を消して、やがて迎へる新しい年への希望に私どもの心は彈むのである。

# 五六岳

中島正文

五六岳は昔から信濃安曇郡の地誌や紀行文によく出て來る著名な山名であるがさて現在の何處の何の山に當るのかと座右の諸書を調べても一寸判らず誰れ彼れに聞いても一向明答してくれぬ。事實大町の古老や案内者に伺ひを立てゝもサーと返答を濁してしまふ。

この山名は遠く藩政の初期、正保三年改めの信濃國安曇郡筑摩郡松本御領分繪圖に「ゴロクゲ岳」と明記されて出ており次いで元祿十三年御改めの信濃國大繪圖にも五六岳の山名出現して居り、以來ずつと各信濃名所繪圖に姿を現はして居るものである。所で古圖の習ひとしてこの山の前後左右に無名の山を無暗目白押しに畫いてあるので位置などはテンで皆目見當が付かぬ。

紀行文の方では天保頃の善光寺道名所圖會中安曇池田の項に「これより大町へ三里、此宿の西に近く有明山とて高山あり、屏風岳五六岳の間に見ゆ。」とあるので鬼の首でも取つたつもりで現地の池田宿にまかり出て見渡しても連峯重疊として餓鬼か蓮華か爺子かさつぱり判らぬ。

是に於て再び繪圖に返つて天保以來の信濃國名所古蹟高附繪圖・信濃國大繪圖さては富士見十三州輿地繪圖等々十指に餘る新古の繪圖を持ち出して勘考して見ても善光寺道名所圖會と正直に符節を合せて居るのを發見する許りである。

次いで明治初頭からの地圖を取り出して見ても之れまた大同小異に畫かれて居て遂には所在を失して居る始末である。

こんな譯けで五六岳の所在を版本や現地人の間から探り出すことは斷念して方向一變、地方に遺存する確實な文献記錄に依つて決定して見たいものだと考へるようになつた。

折りもよし信府統記の他鄕巡回百首の中に「どろく嶽さら〳〵越ヤだいら川、兩國さかふ信濃越中。」と云ふ含蓄ある一首を得たので之れは針木峠附近に聳立する大岳だと云ふ確信を得て心中秘かに喜悅して居た所、はからずも明治十三年版の信濃地誌略を得たので早速調べて見ると「五六岳は平村に而起し西は越中國に屬す、山脈南は烏帽子嶽に連り北は祖父嶽に亘れり。」とあり倍々確信を堅めたが南は烏帽子、北は祖父嶽が何うも判らぬことになつた。

然るに頃日中部山岳々麓を遊行してたま〳〵享保七年の「大澤寺與大町借馬以下八箇山野境用水論裁許之事添繪圖。」と云ふ長い名稱の四疊敷大の古繪圖を獲た。これは享保年中信濃國安曇郡平村の曹洞宗の巨刹大澤寺と隣接町村との用水山論を裁許した幕府御老中の裁決狀の添圖で絶對に確實なものである。此の繪圖の中に裁決の目標になる一箇の大岳が畫かれてあつて「どろくが峯」と名付けられて居る。然かも鹿島川の支流矢澤の源頭をなして居り麓には鹿島の部落も記入されてある。

そこで念の爲めに百瀨愼太郎さんにもしや昔爺子岳を五六岳か又はどろくケ峯と云つて居りませんでしたかと伺ひ立てると、百瀨さん暫く頭をかしげて居られたが「五六岳とは聞きませんが子供の時に爺子岳のことを五だけ六だけヂイゲ岳と唄つて居たことは覺えて居ます。」と云ふ返事なので之は占めたと思つて彼の裁決狀を示すと此の山の形は爺子岳そつくりだし矢澤の源頭を爲して居る所から判じて爺子岳に間違ひありませんと云ふ確言なので「爺子岳即五六岳。」と多年の五六岳の存否の疑問一時に氷解し先づ〳〵五六岳初登攀に勝る共劣らぬ快感を味つた。

所がよい時にはよい事が重さなるもので北安曇郡仁科十二景として高瀨川の夕照・鷹狩山秋月・彈誓寺晩鐘等の例の近江八景式のものが撰まれてあることが判つた。其中に五六岳暮雪と云ふものがあつ

て二三の贊詩が出て居る。

**○五六岳暮雪**　窪田畔夫

伍鹿峯高峙碧空。夏來山雪尙玲瓏。
山靈合記躬耕日。依例遙望播種翁。

**○五六岳暮雪**　降幡　睢

山雪從來似有靈。傳人消息太丁寧。
八旬八夜春將盡、現出老爺播種形。

畔夫は禾田と號し東筑摩郡の人當時北安曇郡長を奉じ白馬登山を試みた風流山岳人である。明治十二年から十九年まで在職した。

睢は雷淵と號し松本藩の士族に生れ長じて村長小學校長郡會議員等を歷任し新撰仁科記、北安曇郡地誌を編した篤學奇行の士である。

兩氏共學識高く安曇郡の主と云はるゝ鄕土智識であるが等しく詩中に遙望播種翁と云ひ現出老爺播種形と吟じ五六岳に種まき爺の出現することを確言して居らるゝ以上最早や余輩の多言は無用である。

（一九・一・二）

## 九州山信

藤島敏男

九州の地に移り住むで、もう久しくなる。いまゝで餘り馴染のない土地なので、大いに歩かうと意氣込んでゐたが、中々思ふやうにならず、僅かに、阿蘇高岳、大船山、市房山、根子岳、祖母山などに登つたに過ぎない。

阿蘇高岳へ鷲ケ峯を經ての登路は、なんでも九州第一の岩場で、ハーケンだの何だの勇ましく打込んであるさうだが、阿蘇全體が極はめて脆い岩質らしく、岩登りをしないと腹の虫が納まらないといふやうな性質を持合せない私には別段興味もないので、頂上から北に派出してゐる尾根ともいへないところを登つた。熔岩のカケラみたいな岩石がゴロ〳〵して、餘りスツキリしない感じである。

頂上から、灰とも砂とも判然としない、ボク〳〵の埃りつぽい尾根を、中岳の噴火口まで下りてくると、もうそこには、日和下駄をはいた爺さん婆さんまでが、大地の底から噴き上げる煙りを、呆れたやうな面持で眺めてゐるといつた工合で、鋲靴などが恥かしいやうだつた。

大船山は久住坊ケツルのあせび小舍へ泊りに行つた時に登つた。坊ケツルは上州鹿澤附近にそつくりの趣きをもつてゐる。二三時間で登られる草山に取卷かれ、鱒の釣れる小川がうね〳〵と流れてゐるこの山合ひの窪地は、居心地のいゝ小舍を別にしてもたしかに好ましいところだ。まして筑紫山岳會の小舍は法華院溫泉に近く宿よりもさらに形勝の地を占めて一日二日の滯在では、物足りぬほどのよさをもつてゐる。丁度福岡からこの小舍の主とも言ふべき會員の加藤數功君がみえて、小舍を繞る自然の四季について、或はまた山登りについて、二晩ほどのびやかな話に耽つたのも、俗念を洗去るに役立つた。

久住山彙の四周に擴がる裾野高原の風景も私を喜ばせた。北の裾は複雜な、南の裾は單調なところにおの〳〵特長をもつてゐる。南麓の高原から綠灰色に塗りつぶされた祖母山の一群を望む景觀は中部でいへば、八ケ岳の裾から秩父連山を眺めるやうな氣分であつた。

久住や阿蘇が草山なのと對蹠的に、市房山はふか〳〵と樹の茂つた山である。玖摩川を溯つて、谷の片側の傾斜地に民家の點在する湯山部落を抜けると、當の市房山が葉をふるひ盡した樹林に山頂まで蔽はれ、茶褐のあたゝかい色に包まれてゐるのが仰がれた。この山は九州脊稜山脈のほゞ中央にあるので、一々列擧するまでもないが、山頂展望の宏さは大したものだ。私達は、風のない、おだやかな秋晴れの、ホカ〳〵とあたゝかい日ざしを享けて、頂上に二時間近くも、たのしい時刻を過ごしたのだつた。

落葉を踏んで下りてくると、ドン〳〵と太鼓の音が、靜かな大氣をふるはせて響いてくる。この朝市房神社の社務所を出るときは、私達のほかに番人の老爺しかゐなかつたのにと思つたが、この日が新嘗祭で、麓の村からたくさんの村人が神社へお詣りに登つてきたのだつた。前夜、青白い月光に寂としてゐた前庭は、時ならぬ賑ひ山の子供達が嬉々と戯れてゐた。湯山でバスを待つ間、私はこの一帶のたゝずまひが、上州神流川上流のどこかに似てゐるなと考へてゐた。

根子岳は、乾いた粉雪が、風に吹上げられて、キラ〳〵と光る冬の薄曇日に登つたが、いよ〳〵本當の冬ごもりに掛つてからは、一時間半ばかりで頂上だつたし、遠く望むと怪奇な岩峯も、登つてみれば灌木がテツペンまで繁茂してゐるので別に書くほどのこともない。

これも東面には屏風とかいふブツシユ交りの物凄い岩壁があるさうだが、私は普通の登路を辿つたに過ぎない。山そのものよりも、かへり途、阿蘇高原のスヽキ野が慌しく暮れてゆく冬の黃昏時、蕭條としてゐたのが、なぜか私の心に强く印象されてゐる。

祖母山もよい山である。晩秋初冬の山村は、裏日本のやうに、あの陰鬱な冬空が早くやつてくる地方は別として、ほかの季節よりも明るく、靜かで、收穫のすんだあとの平和な、落付いた空氣を、通りすがりの旅行者にも、感じさせると、私は思つてゐるが、さういつた愛すべき風趣をもつ村落を、いくつか通り過ぎた。

よく乾いた薪をトロ〳〵と燃やして、煩はされない夜を過ごした營林署の小舍は、疎林の中の、さゝやかな流れに據つて建つといふお誂へむきのものだつた。

頂上の灌木林には霧氷が見本のやうに少しばかり、それでもいくらか冬らしい氣分になつた。手近な古祖母、本谷、傾の諸山、南西に遠く、山名もしかと指呼出來ない脊稜の山々の、黑々とした特徵のない鈍頂が蜒々と眺められ、私をして、はじめて奥秩父に踏分け入つた頃のことを回想せしめたのだつた。

その日の暮れ方、阿蘇高原をはしる汽車の中で、祖母山は何か古淡なあと味を殘こす山だと、私は同行の友に語つたのであつた。

× × ×

私は、いまかうした氣輕るな安易な山歩きをやつてゐるが、それでも山の空氣に觸れたあとは、氣も晴れ〳〵とする。

九州の最高點久住本山が千七百

八十七米餘しかないので、高峻山岳の登攀などゝ力んでみても始まらないし、またそんな旗印を立てなくても、高峻山岳に登り得る機會に惠まれゝば、敢然と立つだけの心構へはもつてゐる。

決戰態勢は裝備や食料で、大いに實踐してゐる。たとへば、鋲靴などいつになれば新しいのが求められるか見當もつかないので、極く稀れに虫干しの積りで穿くこともあるが、いつも紺の脚絆に、刺子足袋、草鞋といふ國粋的いでたちで歩いてゐるし、食料も吾々の日常生活が既にこの通りなので、山小舍に泊つたからとて、ゴソゴソした飯を、味噌汁で掻込むのが高々で、生の牛肉を重いが擔いでゆかうといつたやうなことは、昔戀しい夢物語となつて了つた。食後に羊羹を、紅茶をと、當然のことに考へてゐた時代もあつたが。

パンにバターといつたものも緣遠くなり、握飯が代つて登場してゐる。九州の冬は、つめたいといつても高が知れてゐるが、中部東北の冬山にゆく人達は、凍るむすびを　奈何してゐるかと氣懸りになる。

行軍力養成も、大いに留意してゐるが、汽車バスの通ふところはなるべく之を利用してゐる。歩け〳〵も結構、しかし山の麓までも行かぬ内に、時間が足りなくなるのでは、登山本來の目的を達しないので、乘物の世話になるといふ譯である。

九州で嬉しいのは、前に擧げた山のどれに登つたときも、私達の外に殆んど人影を見なかつたことで、やはり山は靜かなのがいゝ。團旗を先頭に隊伍を組んでといふやうなのは、私は好まない。押すな〳〵の混雜や行列は、日頃都會で滿喫してゐるので、せめて山に行つたときだけは、靜かでありたいと願ふのである。

仲間は本會々員の坂江新堀の兩君や、その他一二の人と一緒で、いつも極く小人數である。集團登山でなければイカンと言はれても全體主義的登山（餘り意味が明確でないが）たるべしときいても、ほかに仲間が身近かにないのだから已むを得ない。まさか、工員募集の立看板みたいなもので、同行者を募る譯にもゆくまい。前記の兩君既にこの地を離れ、これからは、個人的登山禁止令でも出ない限り、私はひとりで山にゆく機會が多くなるだらうと思つてゐる。

こゝまでペンを走らせて、不圖私は嘗て大先輩の木暮さんから、「年に一度でもいゝから山に入るやうに心懸けてゐないと、重い荷を背負つたり、山小舍に寢たりすることが臆劫になつて、やがては山から離れて了ふものだ」と、かう言はれたのを想ひ起した。まことに至言であると思ふ。

幸ひにして私はまだ、荷を負ひ山に眠むることが臆劫になるほど山から遠退いてはゐない。これからも仲間がなければ、たつた一人でも、山の高い低いに關はらず登りたいと考へてゐることを、こゝに記して、この山信を終らう。

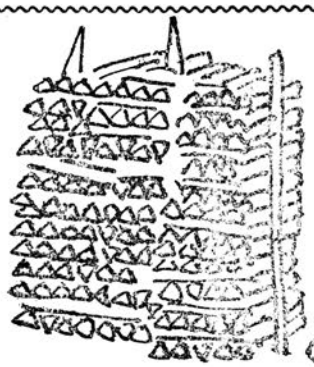
## 切抜帳

### 山岳、地誌、民俗等に關する新刊書目拔萃

（新刊弘報による）

弘報第十六號—第一九號掲載分（刊行豫定日十二月二十一日—一月三十一日）

○御津郡昔話集—全國昔話記錄
○壹岐島昔話集—　〃
○上閉伊郡昔話集—　〃
○直入郡昔話集—　〃
○南浦原郡昔話集—　〃
　柳田國男編　三省堂
○キナバルの民—ボルネオ紀行
　堺誠一郎著　有光社
○南極の征服（下卷）
　道本清一郎譯　法海堂
　—アムンゼン原著
○詩集　岳神
　藤木九三著　朋文堂
　—山と日本民族の傳統を通じて皇國山岳道を稱へむとしたる詩書
○登拜頌
　藤木九三著　山と溪谷社
　—山、自然を鍊成道場と觀じ國民の鍊成に資せんがため編輯したるもの
○樺太風物少
　谷内尙文著　七丈書院
○北氷洋の氣候
　綜合北方文化研究會　大阪屋號書店
　—北極學の權威ヴイゼ博士の「北氷洋の氣候」の譯
○太平洋の熱帶低氣壓
　日本氣象學會譯　長門屋書房
　—ヴイシャー著書の譯書。右同會にて最近の趨勢を調査添付。
○歌集　立山
　柳瀨留治著　朋文堂
○國防登山讀本
　中村謙著　體育評論社
○雪國の民俗
　柳田國男、三木茂著　甲鳥書林
　—東北地方の農村歳時記にして三木氏の寫眞を以つて解說を助けてゐる
○秘境雲雨
　山縣初男著　中文館書店
○南島覺書
　須藤利一著　東都書籍會社
　—琉球の民俗文化を數次の探訪により記述。琉球數學をも紹介
○太平洋圏の民族と文化（上卷）
　太平洋協會編　河出書房
○野草と果實
　下田吉人編　大雅堂
○わが散文詩
　田部重治著　朱雀書林
　—自然、農民生活、幼年時代回想、大東亞戰後の感想等についての斷想と詩
○秩父山塊
　福澤一郎著　アトリエ社
　—素描と文とを以て此地を畫く
○南極と北極
　白瀨矗著　越後屋書房
　—少國民向に記述せるもの
○アジア遊牧民族史
　後藤十三雄譯　山一書房
　—佛國の考古學者ルネ、グルセ著書（一九三九年刊）の譯
○生駒山脈—その地理と歴史を語る
　立命館大學地理學同好會編
　積善館



## 圖書紹介

つには所謂學者といふ概念から外れる學者が居なかつたからだと述べてゐる。然して、「雪にも夏の暑さにも負けぬ逞しい身體を持ち、自然の豊かさと深さ、そして自然人の眞の人間しらさの中に科學しようといふ、心からの欲求を持つ學者」の大いに出ることを希つてゐる。

こゝに掲げられ五た十七册中邦人の著書は十册であり、しかも、邦人の探檢の報告は更に少ない。他は殆んど全部歐米人の著書の翻譯書であることが如實に右の事情を物語つてゐる。

尙、第二報は第一報に洩れた分及び昭和元年より同十三年に到る間の刊行書（邦文單行本）を掲げることになつてゐる。

## アジア内陸踏査探檢文献抄 (1)

山縣　登編

（二高山岳會報特別號）

昭和十四年乃至十八年六月發行

アジア内陸踏査探檢邦文々獻にして編者が最近一年餘の間に集め得たもの五十七册を探檢の行はれた年代順に掲げ、夫々の内容の簡單な解說を附したものである。近來アジア内陸に對して人々が多くの關心を持つてゐることは此樣に多くの書物が現れたことによつても窺ひ得る。從つてこの文獻抄の編輯されたことは最も有意義である。編者はその序文に於て、前世紀の末期以來、アジア内陸地方の探檢は歐米人により盛んに行はれて來たが我國に於ては科學的探檢が、政治的な原因があるにしろ、極めて貧弱であつたことを慨げき、一

## 北海道、樺太、千島列島

自然科學觀察と研究叢書の第一輯として刊行されたものであつてその景觀、植物及鳥獸の分布、昆蟲、農業形態、林業、建築、健康狀態、先住民族、北海道開拓史、北海道の文化規狀を伊藤秀五郎、館脇操　犬飼哲夫、河野廣通、矢島武、原田泰、鷹部屋福平、武田勝男　高倉新一郎、山下多之助諸氏が分擔執筆せるものである。編輯山下秀之助氏。規在我國民にとつて北方は南方と共に極めて重要な地域である。「斯る時期に際會して、北海道、樺太、千島に對する一般國民の認識を更に深めたい微衷に出でたものに外ならぬ」と編者も記してゐる。

卷頭にある伊藤秀五郎氏の景觀の描寫は誠に美しい。本號に同氏の許可を得てそのうちの「四季」の部分を掲載した。

尙、最近館脇氏、鷹部屋福平氏等の著書も別に刊行された即ち、北方の植物（アルス文化叢書）北方圏の家（彰國社）等である。

本叢書の次輯は「日本列島」であつて近く刊行される。

昭和十八年十月　山雅房刊行

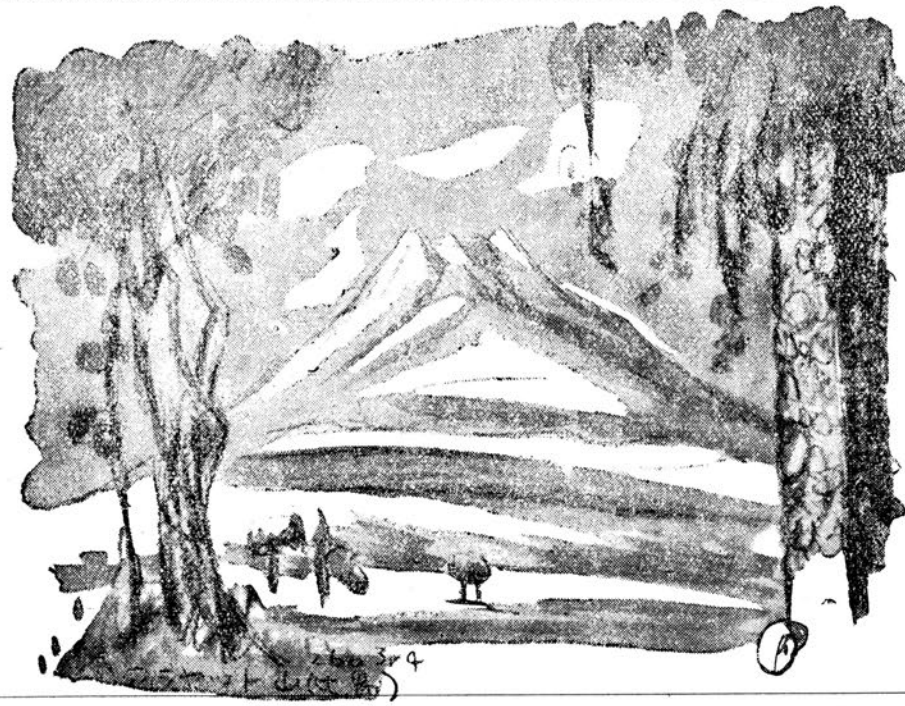
賣價四圓七拾錢

## 桑原武夫著　事實と創作

この粗惡な感じの無い用紙と製本との心地よい大きさの書三〇〇頁のうち約一分の二迄はフランス文學に關するものであり他の部分も山に關するものではないが、こゝに敢て紹介したいと思つたのは「遠野物語」からの一章があるためである。「遠野物語」は柳田國男氏の著書であつて陸中上閉伊郡一帶の口碑集であるが私もその增補版（鄕土研究社刊）を愛藏してゐる。「何か作品を讀んでその背景になつてゐる土地を自身踏んでみたいやうな衝動を感じるのは確かに樂しいことの一つである」と先づ最初に書いてゐる著者は「遠野物語」の地方を一見したく出かけて行く。そして物語の世界とはすつかり變つた今の世界を見る。著者は再び「遠野物語」に還つて「こゝに收められたものは飽くまで說話の蒐集であり、忠實な採集者佐々木氏の口述を柳田さんが筆記されたのであつて、編者の文體が直接現れるべきものではないかも知れぬ。しかし……この物語の編者が簡古な文語體をして內容と完全に合致せしめ、一つ〳〵の話を素朴でしかも氣品の高い短章としたことは、卓見であり手腕であつた」と記しわが國古來の「常民」の文藝から受けた「感動」を述べてゐる。更に「民間傳承」に就いては「幾百年の昔から長らく人間の間に傳はり來つたことは、何かそれだけの深い人間的意味がなくてはならない。科學知識などゝいふが實は常識にすぎぬところのものを以て解釋のつかぬものは何でも棄て去らうとするのは精神の怠慢であり、人間性への不親切に他ならぬ」と記し、アランの言葉「一たび人間の本性について學ばうと志したならば、人間のいつたこと（說話）は不合理であらうとなからうと、先づ第一にその素朴な狀態に殘しておくやうに努めなければならぬ。その方が眞らしい整理などよりも百倍も價値がある。整理されたものから引出せるのは、結局月並なことに過ぎぬのだから。」を引いて柳田さんはこの言葉をそのまゝ實行に移してをられると述べてゐる。誠に同感である。

「遠野物語」が世に出たのは三十餘年も前のことである。この桑原氏の文章も昭和十二年に書かれたものであり、その附記に「かゝる文章は今日では無用に歸したやうである。しかし「遠野物語」再刊の頃は、金田一氏の紹介をのぞき諸新聞雜誌においてこれに言及されたは殆んど皆無であつた。その公憤が私にこの走り書きをなさしめたのであつた。」とある。私もその頃のことは知らず、再刊「遠野物語」を求めたのもその後であつた。昭和十五年に創元選書の一つとして刊行された柳田氏の「民謠覺書」の中の「廣遠野譚」に「遠野物語」のことが記されてゐる。これを讀んで、殊にその父の見た三つの夢の話については、誠に不思議に滲みわたつた心地がしたのであつた。當時私はこの「民謠覺

（カットは田邊主計氏）



北島アラヤツト山　月原俊二

書」の紹介を會報に書きたいと思つたが私には荷が勝ち過ぎて、ぐず〳〵してゐるうちに時期を失したことを今なほ殘念に思つてゐる。「民謠覺書」は多くの人々に愛讀されたことゝ思ふ。そして人々はその中の「まこと此國が自分のものを持たず、如何なる時々の流行にも醉ひ泣きするやうな大衆の巢であるのか。但しは又久しく求むるものゝ得難かつたのにあきらめて假に有合せによつて飢寒を免れようとしてゐるのであるか……」の箇所を記憶してゐることであらう。これは昭和七年の執筆に拘はるものであるが現在に於てもこの「心亂」は依然として私の心にある。結局、如何にわめき叫ばうとも、人々がほんとに我國の持つ美しさに愛着を感じ、自負とおちつきを持たない限り、又すぐ、ぐらついて來るのではないか。

桑原氏の著書の紹介を藉りて柳田氏の著書について述べるに至つた。「事實と創作」のフランス文學に關する部分、スタンダール及ラシーヌについての三章、プロオドウエイ・トランスレイシヨン又は岩波文庫等によつて人々に愛讀された「クレーヴの奥方」についての一章等も樂しい文章である。山へ登る人々のうちにも、これらのものをも好む人々が少くない。

昭和十八年四月　創元社・大阪刊行　定價二圓五十錢

宮崎武夫著

## 蒙古横斷

（京都帝國大學內蒙古學術調査隊手記）

此書は昭和十八年に刊行されたものであるが昭和十三年八月內蒙古へ向つた京都帝大調査隊々員宮崎武夫氏のその時の旅行記である。調査隊は木原均博士を隊長とし隊員十二名であつて、その內に當會々員今西錦司、淺井東一、間直之助、平吉功、加藤泰安、周布光兼の諸氏も參加されてゐる。

一行は八月十六日京都を出發、その二十一日に張家口着、その地を根據地として「八月二十五日から九月二十八日まで約一ヶ月間に亘つて綏遠省の東半分、察哈爾省熱河省の西部などいはゆる內蒙古一帶の主として奥地に自動車を縱横に疾らせて種々の調査に從事し」十月一日張家口を去つて北京へ入り同月十日神戸着京都へ歸還した。

これは學術の報告ではなく（それらの報告はそれ〳〵の專門雜誌にすでにその一部は發表されてゐると序文にある）「蒙古奥地の風物と民情の一斑を傳へ」やうとしたものである。讀者はこの調査旅行そのものに興味を抱くと共にそれらの風物と民情、殊に蒙古人と漢人との關係、又漢人農民の「驚くばかり强靱な粘着力」あらゆる困難な條件と闘ひつゝ「なほも不屈不撓、默々として故里を遠く離れた異境の地で、農耕に勵んでゐる」姿を一四八頁や二五四頁に見、千佛洞に關するR・ペリオやA・スタインのこと（一一五頁）、蒙古地圖のこと（三六頁）又は蒙古馬のこと（二三六頁）等興味ある題材を隨所に見出すことであらう。それらの內でも私の興味深く讀んだのは最後の「考察」の一章である。これは旅行を終つて後種々それについて考察したものであつて既往の他の探檢をも參考とし、次の探檢の場合への助言等を述べたものである。

昭和十三年には、この書にもあるやうに白河に入るあたり「英國旗をかゝげた舟や日の丸のランチが盛んに往き來してゐる。さすがにユニオンジヤックがあちこちに翻つて」ゐたのであつた。其後この書の刊行されるまでには世界は急激な變化を續けてゐる。

昭和十八年六月　朋文堂刊行

隊員撮影による寫眞八葉　踏査行程地圖一葉並交中地圖十餘。

賣價　三圓

（此書の紹介は然るべき人に依頼したく考へてゐたが結局私が書くことになり遲延した）

（以上　田邊主計）

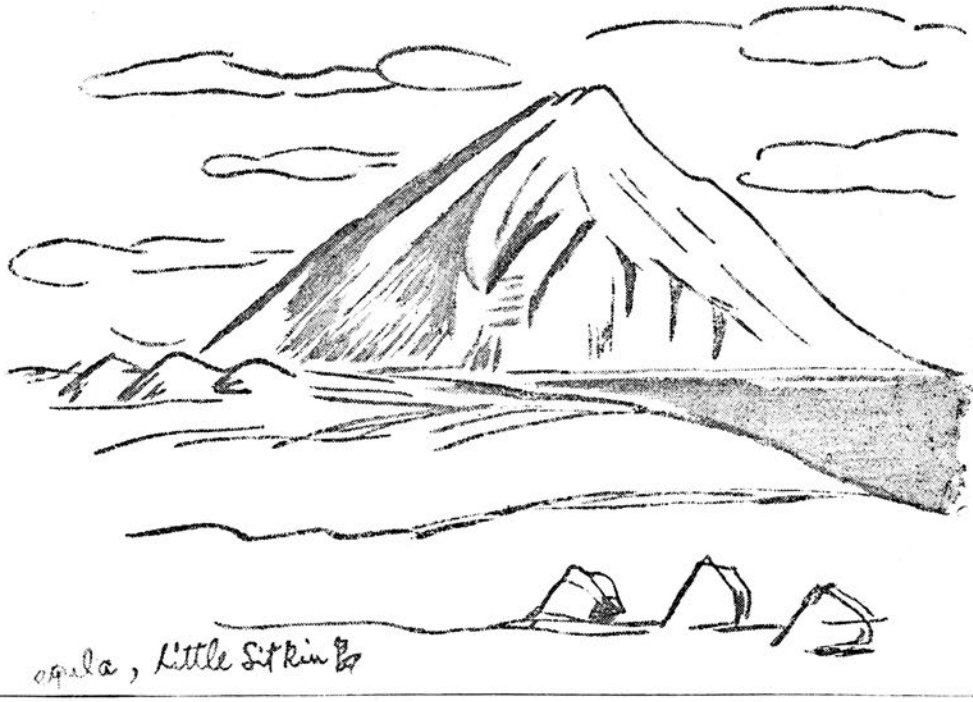
×　×　×

# 會員通信

## ダルカン旗包

北田 正三

胡風一掃秋色の朝は夕べには嚴寒となる。此所ダルカン旗の包に一人祖國の山友諸兄の決戰に御奮闘を祈る。二旬の砂漠の旅に見せまほしきは我恥かしき胡麥。語りたきは天地無限の境。我北の守人として强健なり。十一月十五日




キスカ陣中畫帳より

望月達夫

## 與野の新居より

濱野 正男

益々寒さ厳しき折柄皆様御元氣の事と存じます。小生此の度下記の住所に轉居致し新らしい人生の一足を踏み出す事となりました。今後共よろしく御指導下さる様お願ひ致します。此の邊一帶はまだ武藏野の面影を多分に殘し、のどかな里といつた感じの處です。いづれ春になりましたら參上致すつもりで居ります。

再び御召しの來る迄は充分に山に於て鍛へ御奉公を充分出來る様心掛けて置きます。先づはお知らせ迄 敬具（十二月末日埼玉縣與野町三七〇丸山方にて）

## 千島陣信

望月 達夫

御健勝にて昭和十九年の新春を御迎への事と思ひます。只今當地年末にて久々に内地の便りを澤山もらひ「山日記」「會報一二七號」たしかに拜受いたしました。御禮申上げます。共に内容をじつくり拜見の上又何か申上げ度いと思ひます。小生依然元氣旺盛に過しをります故何卒御安心下さい。時をり訪れる猛吹雪の後には波狀雪をかゞやかした寒國の晴天も巡つて來ます。スキーに向く斜面も多くスキーも手近にありますが色々な關係でまだゆつくり滑つて居りません。その中出來るのを樂しみにしてゐます。土曜の午後がつぶれて虎ノ門も淋しいとか、之も決戰色の一つでせう。御健闘を祈ります。會員各位によろしく（探本宛私信より）

## 比島通信

月原 俊二

「山岳」第三十七年の一號受取りました。ほんとに嬉しい。クリスマスも目前に控へてゐるといふのに加給品の蚊取線香を焚き乍ら半分程一夜に讀んだ。

讀むにつけ「山岳」のために何か一筆と思ふのだが、軍務の傍らで容易な事ではない。會員通信がせい一杯のところ。島の山にも作戰命令でも出ない以上は容易に一兵卒として登攀はおろか、山藏巡りすら出來ない。M島のアボ山（二九五五米突）の頂に山靴の跡を印するのは何時か。また誰であらう。一日も早く科學登攀隊の結成されん事を切望して止まない。

比島の七千餘の島々にも、山稜にも、何かしら遠い昔より寶が藏されてゐるやうな氣がしてなりません。

タール湖心に浮ぶボルカノ火山（世界最低百〇五米）には未だに科學のメスどころか、渡鳥さへ恐れられてゐる傳說の火山島などあり迷信の邦と昔より謂はれたゞけに幾多斯樣な口碑傳說が山々ごとに存することゝ思はれる。今迄の發表物には民俗學的にも見るべきものが尠い。この方面へ權威者の活潑な進出が望ましい。

十六年冬のスキー季の頃はリンガエン灣の僻村で裸一つで作業に從事し、雪への想ひはとくけし飛んでゐた。そして十七年の冬、十八年の冬の舞臺を目前に迎へんとしてゐる。

雪のないクリスマスの夜を迎へる事三たび、どうやら雪への感觸と自信を失ひかけてゐるやうな氣で一杯である。

比島より日本の岳友へ贈る唯一のものはマニラロープでまらう。聽てヒマラヤへの旅にお供するのも近き將來であらう。

されど

〃いくさ日々まさに苛烈灼くる海〃南海に中央大平洋に激突戰展開され、敵數度の反攻に功を奏せずとはいへ、その蔭に數多散華せられたる皇軍將兵の血ぬられし武

アールベルグスキー術　高橋次郎著
日本のスキー術　高橋次郎著
正統派スキー術　高橋・千家共著
Der Moderne Schi-Sport　—Dr. Schneider—
Skijahrbuch 1910, 1913.
The British Ski Year Book 1929

以上　加納一郎氏

## 會員消息

浦松佐美太郎氏　鑛山統制會理事、秘書役）總務部次長兼務となる。

黒田孝雄氏　さきに歸還した同氏は東神倉庫經理課長に新任。

戸田宗吉氏　日本アスベスト株式會社庶務課長に新任。

長屋敏郎氏　桐生高工教授より大東亞錬成院錬成官に轉任、更に陸軍司政官に任ぜらる。

兼松學氏　大東亞省調査官より運輸通信省鐵道總局總務課勤務に轉任。

園山德三郎氏　鹿島組より輕金屬統制會へ轉任。

小野　庸氏　陸軍々醫少尉に任官、軍醫學校に入學。

本多紀元氏　軍需省燃料局酒精部へ轉任。

高橋英次氏（東京雪嶺會代表者）今般召集解除横山工業へ歸任。

西堀榮三郎氏　傳研入院療養中の處十二月下旬全快退院。

## 山岳研究講座(2)會員割引に就てお知らせ

本會關西支部編の**山岳研究講座2**（冬山篇）が舊冬朋文堂から刊行されましたが、會員各位の御便宜の爲左の通り割引してお頒ち致しますから御入用の方は何卒御申込下さい。

**内容**

**北と南**　今西錦司
**積雪と氷河**　田中薫
**雪中露營**　關根吉郎
**スキー術の變遷**　水野詳太郎
**登山に於けるスキー術の應用**　津田周二
**山伏修驗の山**　大伴茂

B6判二六〇頁**會員割引**賣價二圓三十錢**二圓**（送料共）

**申込　三月中**

申込先
日本山岳會關西支部
富田幹事
（大阪市北區堂島上一丁目大阪貯蓄銀行三階）

**なるべく爲替送金の事**

尚振替貯金で送金なさる方は振替料金十錢をお忘れなく加算の事

**振替大阪五五九五〇番**

## 山日記賣切れ

二六〇三年山日記は十一月漸く發賣された旨を先號で御通知申し上げましたが、本會取扱分一千部は既に豫約で一杯の狀態でありました。しかし發賣がひどく後れました爲に豫約した方々のうち多くの出征者其他の不在者を生じたのと、今一つ會員割引が不許可となつて既納代金では不足を生ずる事となりましたので其機會に解約した人も幾分生じましたので、其處に幾分の餘裕を生じたのでありましたが、その分も既に賣切れとなつてしまひました。入手出來なかつた方々には誠にお氣の毒に存じますが發行元にも一部もありませんので何とも仕樣がありません。

尚新しい暦を改めて作成して御送りしますから御入用の方は申込み下さい。この方は郵送費五錢を切手でお送り願ふ事にしましたがこれは一枚五錢といふ意味ではありませんから纏めて申出の方でも五錢で結構であります。

尚十九年暦は早速作つて今頃はお送り出來る豫定で居りました處本暦が手に入らないので、遂おそくなつてしまひましたが、今少しお待ち下さい。出來次第お送り致します。


## 登山家のための山岳書庫

（小店の常備販賣）

○日本山岳會刊行書
○山と溪谷社刊行書
○朋文堂山岳專門書
○愛岳家憧憬書多種
○參謀本部發行地圖
○山岳映畫會切符取扱

東京唯一の山岳書專門店
全日本各登山團体御用

山の家書店
日本山岳會會員　安藤武（タケシ）

（所）東京都本所區厩橋三丁目二十七番地（都電吾妻橋一丁目下車南へ一丁）
振替口座東京一〇三〇六〇番

## 編輯後記

會報の編輯は本號から田邊氏の手を離れ、小野幸氏によつて行はれる事になつてゐたのでありますが、小野氏の依頼された原稿は未だ入手するに到らず、結局この號の原稿は全部田邊氏によつて集められたもので編輯された次第であります。その原稿を小野氏によつて割付を行ひ、最後のメめくゝりを私が致しまして漸く此處にお手許に届け得たのであります。そんな次第で、編輯者の苦勞は容易なものではありません。

會報を少しでもよくします爲に出來るだけ多くの原稿を執筆下さるやう會員各位に改めてお願ひする次第であります。

（塚本繁松）

昭和十九年二月二十三日印刷納本
昭和十九年二月二十五日發行
頒價 ㊐ 二十錢
日本山岳會內
編輯者 田邊主計
發行者 塚本繁松
東京都芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所 社團法人 日本山岳會
電（芝）一六四九
振替東京四八二九
會員番號 二二二〇三三
東京都神田區佐久間町三ノ三七
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話下谷（33）六七九五
會員番號 東三三一七
東京都神田區淡路町
配給元 日本出版配給株式會社

**山と溪谷**
第83號出來。創刊以來十五年の歷史を有する本誌は決戰下唯一の山岳雜誌として倍々重きを加へ、更に今回用紙增配の特典に浴した爲、從來入手難の讀者はこの際書店豫約、又は直接本社御注文願へれば御入手出來ます。（1部 70 送8 年 ₹4.20）

**山岳詩集**
川崎隆章編、祖國山岳美の高貴を傳へ、或は戰ふ銃後の山村を描く散文入り詩集本文二色刷原色版口繪入り（賣價未定）近刊

**槍ケ岳へ**
塚本閤治著、日本山岳寫眞書第五篇、原色版口繪入り、大好評再版三月中旬發賣（賣價 2.50 送.08）

**岳（たけ）**
川崎隆章編、名家山岳隨筆集、百名家合筆の詩、歌、句、繪、文に由る山の再現 原色版口繪入り、大好評發賣中（賣價 3.80 送 .15）

**丹澤山塊**
塚本閤治著、日本山岳寫眞書第六篇、原色版口繪入り、四月中旬發賣（賣價 2.62送 .12）

**登拜頌**
藤木九三著、石井鶴三裝幀、決戰下岳人の戰意を昂める書下し論說隨想九篇に新作詩四篇を加ふ。上質コットン紙使用、目下發賣中（賣價 2.93 送 .15）

**赤城の四季**
猪谷六合雄著、A5判アート刷に上州の名山赤城の四季の名寫眞を展開した待望の豪華版にて、志賀直哉、里見淳 長與善郎、關口泰四權威の隨想を盛る。三月中旬刊行。（賣價 6.00 送 .20）

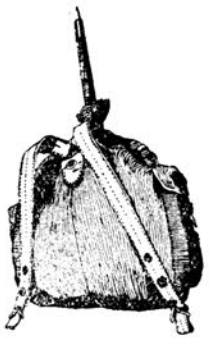
**上越國境**
塚本閤治著、日本山岳寫眞書第七篇、原色版口繪入り、中村謙氏解說と文に依る上越國境全域の詳解書。四月下旬發賣（賣價 2.62 送 .12）

**山岳渴仰**
中村青太郎著、原色版口繪二葉、序小島烏水、木暮理太郎、跋田部重治、裝幀著者、山岳の神聖を繪と文に由り描く中村氏の處女作愈々成る。四月下旬刊行。（賣價4.00送.30）

★本社出版物は書店申込み又は直接本社へ・山溪出版月報進呈★

東京都芝區田村町6—4 **山と溪谷社** 電話（芝）543番 振替東京 60249番

**キスリング型（E式）**
**ルックザック**
御手元にある布地御持參になれば
御調製申上げます



**山とスキー具專門**
東都最古の專門店
東京都神田區神保町三ノ一（專修大學電停前）
**片桐テント登山具店**
電話九段（33）三二一〇番
振替口座東京九一一八四番
店主 片桐盛之助